７月、父の戦死の公報が入り、長男の私が長野のお寺まで遺骨を迎えに行った。翌日、北殿駅から炎天下を歩いて帰る途中、歩くたびに骨箱がカタカタと音がした。「ああ、お父さんのお骨が入っているんだ」と一緒に歩いた３年前のことを思い出しながら、涙が出た。家に着いて母と白木の箱を開けた。「英霊」と書かれた木片、母は「何と馬鹿にしている」と一言つぶやいた。

父の出征の頃から体力をつけようと毎日風呂を焚き入ったら次第に風邪もひかなくなり、中学２年の時は西駒登山も平気で参加した。

高校時代には往復16キロの道を自転車通学だった。次第に自転車も慣れてあちこち乗り回した。細い山道を自転車を担いで通り、遺跡巡りをしたこともある。この頃は自動車も多くはなかったので事故の心配は考えなかった。手良坂から野底を通って水神橋を渡ればあとは薫ヶ丘の高台まで一万円道路を押してゆけば高校の門がある。行きはよいよいだが、帰りはほぼ半分は押して登る。毎年秋のクラス対抗駅伝では辰野から駒ケ根間の三州街道を分担して走った。その後のクラスコンパでは担任の先生に一本献じた。冬でも天竜川沿いの道を素足に下駄ばきで通いとおし、高校では「皆勤賞」をもらった。

大学では地質学を専攻して歩くのが仕事になった。「イーハトーブ」こと岩手県の北上山地を駆け巡り第二の故郷となった。さらにアメリカ西部のニューメキシコ辺りのルート66を疾走してスタインベックの『怒りの葡萄』を思い出したり、北欧では『ペール・ギュント』の出てきそうなフィヨルドの曲がりくねった道をずいぶん走った。モンゴルではウスユキソウの群落に囲まれたゲルに泊まり、羊の肉ばかり食べた。ゲーテの『イタリア紀行』を携えてのローマやヴェスヴィオ火山の旅も楽しい思い出。「シルクロード」は入口までしか行けなかったが、もっと奥まで行ってみたかった。

人生の終着駅に近づき、長いような短いような道を振り返ってばかりのこの頃だが、畿内から伊那を通り奥州に至る東山道や東街道を探して歩くのが趣味で、『おくのほそ道』を辿るのも楽しんでいる。　副題は魯迅の『故郷』から

北上山地で出逢った「ザシキワラシ」
1961年９月撮影
（東北大学名誉教授）

「伊那谷四大珍味」

上岡実弥子

旅先では、できるだけ郷土料理を頂きます。

熊本のからし蓮根、金沢のかぶら寿司、大阪の串カツ、東京のどぜう、沖縄のとうふよう・へちまのみそ炒め、等々。

近年はジビエなど新しい料理も増えましたが、昔ながらの"珍味"も捨てがたい。たいてい甘じょっぱいor塩辛いor酸っぱい。なのでご飯にも合えば酒の肴にもなります。

惜しむらくはワタクシ酒を呑むと量が食べられない。

「少しずついろいろ食べたいなぁ……」
と思っていた矢先のこと。滋賀県の某居酒屋でドンピシャのメニューに遭遇しました。琵琶湖特産の鮒ずし、赤こんにゃく、手長エビ、小鮎etc.、少量多品種盛り合わせでこれぞ私にうってつけ。珍味をアテに地酒を堪能。いや実に楽しかった。

全国の居酒屋さん、珍味少量多品種セットをぜひご検討ください。ワタクシ馳せ参じます。

伊那の名だたる珍味は、いなご・ざざむし・蜂の子・蚕のさなぎ、総称「伊那谷四大珍味」。ところで伊那市の皆さま。実際これらを召し上がったことはありますか？

かくいう私も食べた経験は数えるほどしかなかったのです。が、最近気づきました。伊那谷珍味がお酒に合うことを……。

昨年、伊那谷某飲食店でメニューに蚕のさなぎを発見。珍しいので頂くことにしました。姿カタチはあの蚕のさなぎまんまですが、クリスピーな食感と香ばしい風味はなかなかオツ。

さなぎをポリポリ、ビールをちびちびやっていると、どうやら私は観光客だと思われたようで「よかったらこれもどうぞ」お店の方が蜂の子といなごを追加で出してくださったのです。

「えっ、よろしいのですか？」

「はい、お店のサービスです。この辺の珍しいものなので召し上がってください」

目の前には蚕のさなぎ・蜂の子・いなごの豪華三点セット。

「ありがとうございます！」

私はテンション爆上がり！

その後、地酒「今錦」を追加したのは言うまでもありません。

一般社団法人 伊那市観光協会‘公式サイト：
「おいでな　伊那」
https://inashi-kankoukyoukai.jp/types/dainty/page/4/

（（株）キャラウィット代表取締役）

近くて遠くなった故郷

神沼　靖子

2025年１月、私は87歳となりました。大学時代は東京、就職し、結婚をしてからは神奈川県、夫の転勤により、それまでの横浜国立大学を辞め４年間は宮崎県小林市で過ごしました。勤務先の霧島火山観測所はえびの高原にあり、毎月のように子供を連れて観測所を訪れ、霧島錦江湾国立公園は自宅の庭のような感じで過ごせたのは幸せでした。八百屋でリンゴを買おうとしたら「高いですよ」と言われ、信州との距離を感じました。

夫が新しい研究所に移ったのを機会に、埼玉県浦和市（現さいたま市）に住み始めました。ここで再び埼玉大学に勤務するようになりました。一人息子も大学に入り、私は千葉県君津市にある帝京平成大学、その後は群馬県の前橋工科大学に勤務するようになり、週末に浦和に帰る生活が続きました。

63歳で前橋工科大学を定年退職し、夫の住む神奈川県藤沢市に移りました。スープの冷めない距離にマンションを購入し、住居兼事務所としました。退職後も現役時代からの継続で情報処理学会フェローとして、専門書の監修などを続けていました。

現在、夫は藤沢市から15キロ西の平塚市にマンション住まいをしており、同じ場所に私用の部屋、さらに隣には病院に併設した介護付き老人ホームがあり、時期が来ればそこに入所する予定です。藤沢のマンションからは南に、江の島、真西には富士山と箱根連山が眺められ、眺望は良いのですが、信州の山々と比べるとスケールが小さいのが不満です。

逆に湘南海岸からは100メートルの距離の平塚のマンションからは相模湾が一望できます。東側には三浦半島から房総半島、真南には伊豆大島、西側には伊豆半島から箱根山、玄関を出ると富士山、さらに北には丹沢の山々が見えます。山の景色より海の景色が楽しめるロケーションです。

若い時には山に囲まれ、晩年は海を眺める環境です。距離的には近いですが、自分の年齢を考えると故郷も遠くなりました。

（情報処理学会フェロー）